

第30回結核予防関係婦人団体中央講習会  
秋篠宮妃皇嗣妃殿下 おことば



令和8（2026）年2月25日（水）

本日、「第30回結核予防関係婦人団体中央講習会」の開講式にあたり、全国よりお集まりの皆さまにお会いできましたことを、大変うれしく思います。

今年は、東京で「結核予防関係婦人団体中央講習会」が開催されるようになって30年目になります。

この30年をふり返りますと、日本における結核対策は、治療法や検査技術の進歩、多剤耐性結核への対応など、着実に進展してまいりました。そうした中で、婦人会の皆さまは、全国各地において結核やその他の感染症の正しい知識を地域の人々へ伝え、健康を支える活動に熱心に取り組むなど、大切な役割を果たしてこられました。昨年9月の厚生労働省の発表によれば、日本で1年間に新たに登録された結核患者数は約1万人、罹患率は8.1となり、2021年から4年連続して低まん延の水準を維持しています。

世界に目を向けますと、結核は依然として深刻な感染症です。WHOによる推定では、世界で一年間に約1,070万人が結核を発病し、約120万人が結核で亡くなっているとされています。そして、世界の人口の約4分の1がすでに結核菌に感染しており、栄養不足やHIVウイルスへの感染による免疫の低下などの要因が、結核を発病するリスクを高めるとされています。そのため、WHOは国や地域を越えた結核対策への協力を呼びかけています。日本でも、高齢者などを中心に結核の発症がみられることや、診断の遅れが重症化につながるなど、引き続き注意を要する課題が残っています。

この30年の間には、SARSや新型インフルエンザ、そしてCOVID-19など、新しい呼吸器感染症が社会や地域の暮らしに度々大きな影響を及ぼしました。結核予防婦人会は、COVID-19が流行した時期には、不足していたマスクを作って支援したり、医療従事者への理解を呼びかけたり、健康を保つための情報の発信や、地域の人々が孤立しないよう工夫しながらの見守りを続けたりなどされ、あたたかい気持ちが伝わってきました。このように長年にわたり、人々が健康にすごせるよう力を尽くされてきた皆さまに深く感謝いたします。

毎年おこなわれる本講習会は、参加者が講義などを通じて、新たなことを知り、学びを深めるとともに、それぞれの経験や課題を伝え合う、話し合いの場となっています。私も今回の講習会で皆さまとご一緒にさまざまなことを学び考え、人々の健康を支える活動を進めていく大切さを共有できましたらと思っております。

この二日間にわたる講習会が、皆さまにとりまして意義深いものとなりますようお願い、開講式に寄せることばいたします。